

# 『太平広記』 鬼部説話の構成

## ― 鬼一（鬼十）―

The Ghost Stories of "Taiping Guangji"

Vol.1 - Vol.10

三田 明弘

Akihiro MITTA

(日本女子大学人間社会学部)

### 要約

本稿は、宋初までの中国鬼話の集大成である『太平広記』の鬼部説話四十卷の内、冒頭の十巻について、巻毎の鬼話の特徴を分析しつつ、初期の鬼話の変遷の具体相を解き明かすことを目指したものである。十巻の所収全話の分析を通して、日本の幽霊譚のルーツでもある中国鬼話について、特にその初期においては、婚姻・祖先供養・後嗣などの家制度と密接に関わるモチーフの多いことや、頻出する話型を明らかにした。

### [Abstract]

"Taiping Guangji (Extensive Records of the Taiping Era)" is a collection of stories compiled under the editorship of Li Fang, first published in 978. The book is divided into 500 volumes and 40 volumes of them are ghost story parts. In this paper, I have analyzed the quarter at the beginning of the ghost story parts. The results of the analysis, I have cleared ideological features and features on the story type of early ghost stories.

### はじめに

『太平広記』は、宋までに成立した説話から七〇〇余話を類聚した、中国説話の集大成とも謂うべき全五〇〇巻の説話集である。宋の太宗の勅命により五代後周の旧臣である李昉らによって太平興国二年（九七七）から編纂が開始され、翌太平興国三年に成立した。

巻毎に所収説話の分類項目が見出しとして立てられており、全体では以下の九十二項が立項されている。

神仙、女仙、道術、方士、異人、異僧、釈証、報応、徴応、定数、感応、讖応、名賢、廉儉、気義、知人、精察、俊弁、幼敏、器量、貢挙、銓選、職官、権幸、将帥、驍勇、豪侠、博物、文章、才名、儒行、楽、書、画、算術、卜筮、医、相、伎巧、博戯、器玩、酒、食、交友、奢侈、詭詐、詔佞、謬誤、治生、徧急、談諧、嘲諷、嗤鄙、無頼、軽薄、酷暴、婦人、情感、童僕、夢、巫、幻術、妖妄、神、鬼、夜叉、神魂、妖怪、精怪、靈異、再生、悟前生、冢墓、銘記、雷、雨、山、石、水、宝、草木、龍、虎、畜獸、狐、蛇、禽鳥、水族、昆虫、蛮夷、雜伝記、雜録

このうち「鬼」は卷三二六から卷三五五まで四十巻に及び、卷一から卷五五まで五十五巻の「神仙」に次ぐ大項目となっている。

説話の排列は、基本的には時代順になっており（厳密なものではない）、秦漢から唐代までの鬼話の変遷を概観できるものとなっている。

本論考では、巻毎の鬼話の特徴を分析しつつ、鬼話の変遷の具体相を解き明かしてゆきたい。

一 冥婚譚―巻三二六 鬼一―(春秋 漢 三国)<sup>(1)</sup>

まず、「鬼」の冒頭巻である「巻三二六 鬼一」全話のタイトルと概略を以下に掲げる。(以降も各巻の分析の冒頭に、その巻の所収全話のタイトルと概略を掲げる<sup>(2)</sup>。)

巻三二六 鬼一

韓重 韓重は呉王夫差の死んだ娘と結婚した<sup>(3)</sup>。

公孫達 鬼となった魏の公孫達が子らに教戒を施した。

鮮于冀 鬼となった後漢の鮮于冀が後任の役人の不正を告発した。

盧充 盧充が鬼となった娘と結婚し、子を得る。

談生 談生が鬼となった娘と結婚し、子を得る。

陳蕃 陳蕃が、何者かが生まれたばかりの子供の運命を予言するのを聞いた。

劉照 前太守に遺体を置き去りにされた亡妻が後任の太守と通じた。

張漢直 妖物が張漢直の鬼のふりをして妹に憑依した。

范丹 自らの横死を偽装し遊学した范丹のために、神が范丹の鬼のふりをした。

費季 呉の費季の旅中に妻の夢に費季が現れ横死を告げたが、一年後に帰還した。

周式 死人録から名を削除してもらった漢の周式は、約を破り外出したため死んだ。

陳阿登 ある人が郊外で一夜の宿を借りた女は、鬼であった。

編纂者の編纂コンセプトを探る上で重要である冒頭話は、相思相愛で

あった韓重と呉王夫差の娘が、娘の死後に結ばれる人と鬼の冥婚譚である。そして「盧充」「談生」なども、類似したストーリーの冥婚譚であり、「劉照」も冥婚譚のバリエーションである。「陳阿登」も亡女の墓に宿泊するという冥婚譚によく見られる構図であるが、本話の場合は宿泊のみで、冥婚は行われない。

一方、「公孫達」「鮮于冀」は男の鬼が自宅やかつての職場に現れるというもので、特に「公孫達」は「鬼が親族と語り、冥界について問答をする」という、後により複雑化し発展する話型のプリミティブな例として注目される。

「陳蕃」「周式」は、人間は知り得ない生死の運命を鬼は知っているという、鬼の大きな特徴の一つを示す説話である。二話とも話型としては日本の民間伝承説話等にもよく見られるものである。

「張漢直」「范丹」「費季」は、本人以外の何者かが、その人の鬼のふりをするというもので、「装鬼(鬼のふりをする)」型と分類することが出来る。

全体としては、この巻では死者と家族の関係性が説話の重要な要素となっている。

二 供養を求める鬼―巻三二七 鬼二―(漢 三国 晋)

巻三二七 鬼二

呉祥 漢の呉祥が一夜の宿を借り、同衾した女は鬼であった。

周翁仲 周翁仲、見鬼人の言葉から子供が実子でないことを知る。

田疇 公孫瓚に殺された主君劉虞の後を追おうとした田疇は、劉虞の鬼に諫められた。

文穎 漢の文穎が夢に現れた鬼の頼みで半ば水没した棺を掘り出す。

魯肅 病んだ孫権は、魯肅の鬼が来るのを見た。

王樊 死後、墓中で博打をしていた王樊は盗掘者に酒を飲ませ、役人に捕まえさせた。

「呉祥」は前巻末尾の「陳阿登」に類似した説話であるが、冥婚譚のモチーフを有する点が異なっている。「王樊」「胡熙」も墓の中で鬼と遇う話である。

秦巨伯 秦巨伯は孫に化けた鬼を捕まえようとして、本物の孫を刺殺してしまった。

「周翁仲」は祖先供養がテーマであり、「文穎」「沈季」「糜竺」は何れも鬼が供養を依頼する話である。「夏侯玄」では夏侯玄が自身の供養の場に現れ、供物を吸収する様子が描写されている。

宗岱 無鬼論者の青州刺史宗岱は淫祀を禁じ、鬼の復讐で死んだ。

「秦巨伯」「宗岱」「鄭奇」は鬼が人間を害する話であるが、宗岱では無鬼論者のために自分への供養が途絶えたことを鬼が怒っており、これも供養と関わりのある説話であると言える。

鄭奇 鄭奇は鬼魅のいる亭の楼上に女鬼と泊まり、翌日、出立した後に死んだ。

すでに触れた「糜竺」「夏侯玄」に加え「田疇」「鍾繇」「嵇康」「王弼」「魯肅」は著名人物の逸話としての意味を有する説話であり、特に

鍾繇 鍾繇のもとに通ってくる女は鬼であった。

「嵇康」が鬼より広陵散を伝授される話はよく知られている。「倪彦思」は鬼が家に居着いて様々な怪を為すという多くのバリエーションが展開される話型の初期のものである。「胡熙」もその話型に含まれるが、家にいる鬼が実の子であるという点で特異なものである。

夏侯玄 夏侯玄の鬼は首を外して供物を体に入れ、仇の司馬師の子孫を断つたと話した。

この巻には供養に関連する話が多く、前巻とともに鬼話・鬼文化と家制度の関係性を反映させたものとなっている。

嵇康 嵇康は鬼より琴の曲、広陵散を伝授された。

「倪彦思」は鬼が家に居着いて様々な怪を為すという多くのバリエーションが展開される話型の初期のものである。「胡熙」もその話型に含まれるが、家にいる鬼が実の子であるという点で特異なものである。

倪彦思 倪彦思の家に住み着いた鬼魅は役人の汚職等も知っており、手が出せなかった。

この巻には供養に関連する話が多く、前巻とともに鬼話・鬼文化と家制度の関係性を反映させたものとなっている。

沈季 許劭の鬼に改葬を依頼された沈季は墓の所在を知らず、招魂をして改葬した。

「糜竺」は女鬼に頼まれ改葬してやったために火災の際も冥助があった。

糜竺 糜竺は女鬼に頼まれ改葬してやったために火災の際も冥助があった。

王弼は軽んじていた鄭玄の鬼に責められ、これを憎み、後に病死した

王弼 王弼は軽んじていた鄭玄の鬼に責められ、これを憎み、後に病死した

商人の陳仙は空き家で鬼に驚かされ、翌日見てみると家はなく、塚であった

陳仙 商人の陳仙は空き家で鬼に驚かされ、翌日見てみると家はなく、塚であった

胡熙の娘は覚えなく妊娠し、姿の见えない鬼子を産み、育てた。

趙伯倫

趙伯倫が襄陽に行ったとき船頭が供物をこまかし、夢に出た鬼が怒った。

朱彦

朱彦が荒地を拓き建てた家に怪異が起きるが恐れなければ何事もなかった。

桓回

桓回に成憑の消息を尋ねた老人は鬼であったので、成憑に祀らせた。

周子長

周子長が寺の前で鬼とつかみ合いをした。

荀澤

荀澤は死後も姿を現わし妻を妊娠させたが、生まれたのは水であった。

桓軌

桓軌の下にいた陳道生が、水死して河伯に仕えることになったと母に知らせた。

朱子之

朱子之の家によく来る鬼が、子之の子の病を治すため虎の心臓を取ってきた。

楊羨

楊羨は鬼に化かされ、身重の妻を鬼と勘違いして斬り殺してしまった。

王肇宗

病死した王肇宗が母と妻の前に現れ、妻が喪明けに死ぬことを予言した。

張禹

張禹は、死んだ女が後妻を殺すのを手伝い、絹五十匹をもらった。

邵公

瘡を患っていた邵公は発作の度に出現する子供を捕まえ、回復した。

呉士季

瘡を患っていた呉士季が武昌の廟に祈ると神が子供を捕まえ、呉は回復した。

周子文

山中で狩をしていた周子文は自分の名を呼ぶ人に射られ、数日後に死んだ。

王恭伯

王恭伯が旅先で琴を奏であい契った女は鬼であった。

李経

酔った朱平が李経を殺そうとしたが、鬼が失敗を予言し、止めるよう忠告した。

謝邈之

鄒覽から亡夫亡児に会った話を聞いた女は再嫁を止めた。

彭虎子

家に来た霊物に彭虎子が殺されそうになったが、殯屋の亡母が助けた。

司馬恬

司馬恬は、夢で鄧艾に廟の修理を命じられた。

阮徳如

阮徳如は廁で鬼に遭遇したが慌てずに笑うと、鬼が恥じて退いた。

陳慶孫

鬼が陳慶孫から牛を脅し取ろうとしたが失敗し、鬼は詫びて陳に寿命を教えた。

甄沖

謎の者の婚姻を申し出を拒み通した甄沖は相手宅から家に帰り数日で病死した。

陸機

「陸機」は、前巻の説話では鬼に遭遇した王弼自身が鬼として現れる著名人譚。

趙伯倫

「趙伯倫」「桓回」「司馬恬」は供養に関わる説話である。

朱彦

「朱彦」「朱子之」「楊羨」「阮徳如」「陳慶孫」は鬼が家に居着いて怪を為すタイプの説話であり、「朱彦」「阮徳如」「陳慶孫」は鬼に対して動揺せず人が勝利するが、「楊羨」は鬼の奸計に掛かってしまう。「朱子之」は義理堅い鬼を描き、後世の『聊齋志異』巻一「王六郎」における鬼を彷彿とさせるものがある。

周子長

「周子長」「周子文」は戸外で人を襲う鬼に遭遇する話。ただし「周子長」はユーモラスな話となっている。「李経」は不意に現れた鬼が予言によって人の狼藉を制止しようとする。

「荀澤」「桓軌」「王肇宗」は鬼となった夫や息子が帰ってくる話であり、「彭虎子」は鬼となった母が息子を助ける。

「張禹」「謝邈之」は一夜の宿を借りたのが鬼の住む塚であったという、前巻までにも見られた話型であるが、それで話が終わらず、どちらもある主人公が鬼の生前の家族に関わることになる、という点に特徴がある。

「邵公」「呉士季」は子供の姿をした疫鬼を捉える話である。

「王恭伯」「甄沖」は冥婚譚であるが、「甄沖」は冥婚を拒み、落命するに至るといふ点に従来のパターンと異なる展開が見られる。

本巻で見られた、鬼に遭っても動じず冷静に対応することによって鬼を制することが出来るというテーマは、後の鬼話でもしばしば現れることにある。

#### 四 冥界のことを語る鬼―巻三一九 鬼四―(晋)

卷三百一十九 鬼四

張子長 張子長の私通した亡女は復活しかけていたが、親に棺を開けられて失敗した。

桓道愍 亡妻が、嫉妬の罪で地獄に落ちたが転生することになったと桓道愍に告げた。

周臨賀 周が宿を借りた女は鬼で、夜に女が雷車を押しに出かけると、大雷雨があった。

胡茂回 見鬼人の胡茂回は廟の鬼が沙門を恐れるのを見て、仏を崇めるようになった。

阮瞻 無鬼論者阮瞻は鬼を論破したが、相手の正体を見て、一年

あまりで死んだ。

臨湘令 臨湘令殷氏は三丈の鬼と争い、口を打たれて不自由な体になった。

顧氏 昼に外で鬼に囲まれた顧氏は北斗を念じて助かったが、鬼は家に翌朝までいた。

江州録事 子が病死した甘録事を鬼の行列が訪れ、酒甕を出す空になつていた。

陳素 生まれた女子を隣家の男子と交換すると、祖霊への供物が他家の鬼に喰われた。

胡章 友人の管雙が夢に現れた胡章が護符を貼ると、管雙が現れなくなつた。

蘇韶 蘇韶の鬼がいとこの蘇節のもとに現れ、鬼についての様々な質問に答えた。

夏侯愷 病死した夏侯愷が阮公の元に現れ、阮の子らについて預言をした。

劉他 劉家に食を盗む鬼がおり、毒を喰わせると怒り、闘うと夜中にいなくなった。

王戎 王戎の出世を預言した鬼が、人の葬儀で参会者を斧で倒した。

王仲文 王仲文は白狗から方相の如き姿に変化したものに襲われ、逃げながら絶命した。

「張子長」は冥婚譚であり、女が復活に失敗するのは「談生」(巻三一六)と同工異曲である。

「桓道愍」「江州録事」「胡章」「蘇韶」「夏侯愷」は親しい人間が死後

に鬼として現れる話型の話であり、「桓道愍」は嫉妬の罪で地獄に落ちるといふ仏教的モチーフが見られる。「江州録事」は、はっきりとは姿を現さないが、死者の行列の中に亡鬼もいると言われる話である。「胡章」は鬼が訪問することを友人である生者が忌避するパターンである。「蘇韶」「夏侯愷」はすでに「公孫達」(卷三二六)に見られた「鬼が親族と語り、冥界について問答をする」という話型である。「公孫達」では、公孫達は「鬼神之事非爾所知也」と言つて子らに冥界のことを語らなかつたが、「蘇韶」は冥界についての問答が充実した内容になっている点が注目される。

「周臨賀」は宿を借りた相手が鬼であつたという話型に属するが、その鬼が雷神の手伝いをしていたという点に特徴がある。

「胡茂回」「陳素」は、見鬼人の目を通して廟の鬼たちの様子が描かれる。跡継ぎが取り替えられたために祖霊の居場所がなくなるといふ「陳素」のモチーフは「周翁仲」(卷三二七)と同じである。

「阮瞻」「臨湘令」「顧氏」「劉他」「王戎」「王仲文」は鬼に襲われる話である。「阮瞻」のような無鬼論者が論破した後には相手が実は鬼であつたことを知るといふのも、類話が多く、一つの定型となつてゐる。「劉他」は鬼が人の家に住み着いてしまうパターンであり、この話型の場合には、鬼が食べ物を盗むという描写が多くなる。この話型の場合には、鬼が食べ物を盗むという描写が多くなる。この話型の場合には、鬼が食べ物を盗むという描写が多くなる。

本巻は、親族や友人が鬼となつて現れる話型に特徴的なものが多い。

## 五 見鬼人―卷三二〇 鬼五―(晋)

卷第三二〇 鬼五

蔡謨 光録大夫の蔡謨は、魂呼びをされる中で昇天する少女の霊

又

姚元起

を見て、病気になり死んだ。  
蔡謨は、魂呼びをされる中で昇天する老嫗の霊を見た。  
姚元起の七歳の娘は四面の高天大將軍に何度も飲み込まれ排出されて衰弱した。

閻勸

閻勸は二人の役人に船で連れ去られ古い塚で解放されたが、瘡を發して死んだ。

孫稚

仏法を信じていた孫稚は死後に数回、家に帰つて冥土のことを語つた。

索遜

船に便乗した鬼に船を引くのを手伝させた索遜は、鬼に恨まれて襲撃された。

馮述

馮述は謎の役人に連行されかけたが弟の喪に服しているのが不浄として免れた。

任懷仁

殺された任懷仁は祀つてくれた男を自分の喪明けの祭りに誘ひ、饗応した。

王明

王明は天曹に許され、死んで一年後に暫く家に帰り、子らに冥途のことを語つた。

王彪之

王彪之は亡母の忠告により、厄を避けるために旅に出、三年にして帰つた。

王凝之

王凝之の死んだ子らが枷を着けて母の前に現れ、追福を依頼した。

姚牛

姚牛の罪を減刑した令が、姚牛の父の鬼に助けられた。

桓恭

食事の度に古い墓に食を分けていた桓恭は、鬼に出世を預言された。

阮瑜之

孤貧の阮瑜之の暮らしを助けた鬼は生まれ変わるためにいなくなつた。



劉澄 見鬼人の劉澄は將軍の宿舍が火災に遭う前に赤服で赤い幟を

持った小兒を見た。

劉道錫 從兄の見鬼人に、災いとなる鬼の住処を聞いた劉道錫は、戟

で鬼を刺し殺した。

趙吉 びつこの男を埋めた場所で二十年後に見鬼人がびつこの鬼を

見た。

司馬隆 徐府君の墓中の壞棺を取って車を作った司馬隆らは祟られ、

凶禍が止まなかった。

「蔡謨」は鬼を見てしまった見鬼現象の説話であり、「劉澄」「劉道錫」

「趙吉」は常に鬼が見える見鬼人の話である。見鬼人の力を借りて鬼を

退治する「劉道錫」は、単にどのような鬼が見えたのかを語る他の二話

とは趣の異なるものとなっている。

「姚元起」「索遜」は鬼に襲われる話であり、「閻勸」「馮述」は鬼に連

れ去られる話、「司馬隆」は鬼に祟られる話であり、これらは鬼の被害

を受ける話である。

一方、「任懷仁」「姚牛」「桓恭」「阮瑜之」は鬼に施した親切により、

報恩を受けるという説話である。

「孫稚」「王明」は「鬼が親族と語り、冥界について問答をする」話

型であり、「王彪之」は母が、「王凝之」は子が鬼となって帰ってくる話

である。

本巻は見鬼についての記述が多いのが特色である。

六 ユーモラスな鬼話―卷三二― 鬼六―(晋 後涼)

卷第三二― 鬼六

郭翻 郭翻は死後、子に憑依して庾亮らの冥界での様子を語り、書

を為し詩を作った。

王瑗之 王瑗之は蔡という博学の鬼と談義し、蔡邕が仙人となったこ

とを聞いた。

牽騰 節度無く車で出掛けた沛群太守牽騰は鬼に外出を妨害され五

十日後に誅された。

新鬼 新鬼は友鬼に怪を為して人間より食を得る術を習った。

劉青松 劉青松は魯郡の太守とするという命を受け、冥官と悟り、後

事を処理して死んだ。

庾亮 廁で土中より出現した怪物に遭遇した庾亮は拳でこれを打

ち、病気になる死んだ。

司馬義 司馬義は死後、命に背き再嫁しようとした妾を射て美声を奪

い再嫁できなくなった。

李元明 夜半、名を呼ばれて連れ去られた李元明は、塚に閉じ込めら

れた。

張闔 張闔を冥途に連れに来た鬼は張闔の饗応を受け、身代わりの

人を連れて行った。

庾紹之 病死した庾紹之は仲のよかった從弟の宗協のもとに現れ、殺

生を戒めた

韋氏 姚泓北伐の戦の際に負傷し困窮していた韋氏のもとに深夜、

一千錢が届けられた。

胡馥之 子無くして死んだ胡馥之の妻は、死んだ身で夫と交わり子を

産んだ。

賈雍 術を使うことの出来た賈雍は賊に首を切られ、首の無いまま

帰営して死んだ。

宋定伯 宋定伯は鬼のふりをして本物の鬼を欺き、羊に化けた鬼を市

で売ってしまった。

呂光 後涼の呂光の世に鬼が街中で叫んだのは、呂光の死後の兄弟

争いの予言であった。

「郭翻」「庾紹之」は「鬼が親族と語り、冥界について問答をする」

話型である。「司馬義」は復讐のために自らの妾の前に現れる男の鬼の

話であり、「胡馥之」は妻の責任を全うするため鬼でありながら出産を

するというもので、同じく身内の前に出現する鬼の話でも「司馬義」と

「胡馥之」は対照的な内容である。

「王瑗之」は著名人物である蔡邕に関する逸話である点に価値のある

説話である。

「牽騰」「呂光」は、鬼の出現が後に起きる禍事の予兆としての意味を

持っている。

「新鬼」「宋定伯」は、鬼の視点から、鬼の様々な能力や特徴、暮らし

ぶりなどを描写する。

「劉青松」「張闔」は「冥途への召喚」というポピュラーなモチーフの

話である。「劉青松」のような冥官への任官のパターンも、「張闔」のよ

うな賄や身代わりによって免れるパターンも極めて多くの類話がある。

「庾亮」「李元明」は鬼に襲われる話。「庾亮」は著名人物の逸話でも

ある

「韋氏」は、鬼話に含まれている理由が不明瞭な説話である。韋氏に

銭を持ってきたのが鬼であるという解釈なのであるが、韋某の境遇に同情したのが、鬼なのか、それとも、より上位の鬼を使役する存在なのか、はつきりしないのである。

「賈雍」も、鬼話と断するには、やや躊躇する内容である。帰営した時、賈雍はすでに鬼となっていたのか、死の直前の最後の神術であったのか、はつきりしないのである。

本巻において、最も注目すべきは、鬼文化を考察する上で重要な内容を豊富に含む「新鬼」「宋定伯」の二話である。この二話は、筆致や、ストーリー展開も他の鬼話には見られないユーモラスなもので、極めて特異な説話である。

## 七 家族・知人の鬼—巻三三二— 鬼七—(晋)

### 卷第三三二 鬼七

陶侃 陶侃は廁神と遭遇し、富貴の身となることを予言された。

謝尚 見鬼人の夏侯弘は謝尚に子が出来ない理由を、その亡父から聞いた。

襄陽軍人 戦死した軍人が送り返される遺体が自分ではないことを妻の

夢で訴えた。

呂順 妻の死後、その従妹を娶った呂順は、妻ともども亡妻に殺さ

れた。

桓恭 食事の度に古い墓に食を分けていた桓恭は、鬼の恩返しで寧

州刺史の位を得た。

庾崇 溺死した庾崇は家に帰ったが妻は恐れた。また妻子の困窮を

見て妻を死なせた。



曹公船

官妓を載せて転覆した船が濡須口にあり、夜には管弦の調べや歌が聞こえる。

王志都

死んだ馬仲叔は、妻のない王志都のために女子を連れてきて結婚させた。

唐邦

冥官に塚の中に連れて行かれた唐邦は、人違いと分かつて解放された

王矩

鬼となった知人が王矩に冥官への任官命令を届け、王矩は病死した。

周義

周義は病死した後も、毎夕、妻の元に来て寝た

袁乞

袁乞の亡妻は、再婚した袁乞を責め、陰部を刀で割いて使えなくした。

王恒之

王恒之との生前の約により、応報の理が真実であると筮法師が伝えに来た。

劉遁

劉遁は家に巣くい悪事を働く鬼を、野葛を煮て飲ませて追い払った。

王思規

王思規は冥官に任命され、空中に昇天する人の行列を見た。

華逸

華逸は死後七年にして家に帰り、殺生の罪で寿命が減ったこと等を語った。

張君林

張君林の家の鬼は若い女で、家事を手伝った。家が豊かになった後に去った。

蛮兵

鬼が蛮兵に憑依し、予言等を為した。老鼠の仕業という。

陳臯

船に乗り込んだ赤鬼を陳臯が打つと四散して火となり、陳臯はまもなく死んだ。

袁無忌

袁無忌の家に現れた女鬼は井戸に入り、井戸の遺体を葬り直すとはなくなつた。

新蔡王昭平

攻撃の声を聞いた王が兵を集め、声の方を射ると鬼らが倒れて土中に入った。

遠学諸生

遠方で病死した子が父母を車でそこまで連れて行つた。

「陶侃」

「桓恭」は鬼によって富貴となることが予言される。「桓恭」は「桓恭」（卷三二〇）とほぼ同話であるが、内容にやや異同がある。

卷三二〇では桓恭が寧州刺史になるのはあらかじめ定められた運命であるとなつてゐるが、本巻では、鬼が報恩のために寧州刺史になれるようにしたと読み取れる表現になつてゐるのである。「蛮兵」も、鬼が予言をする話である。

「謝尚」は見鬼人を通して、亡父から冥界のことを聞く話である。「華逸」は父、「襄陽軍人」「庾崇」「周義」は夫の鬼が帰ってくる話。「呂順」「袁乞」は妻の鬼が再婚した夫を害する話。「遠学諸生」は息子の鬼が、遠方にある自分の死亡地点まで両親を連れて行くため、迎えに来る話である。「王志都」「王恒之」は親しく交際していた知人の鬼が現れる話で、「王志都」では鬼が生きている者同士の婚姻を取り持ち、「王恒之」では鬼が生前の約束に基づき、冥界の真実の一端を伝える。

「曹公船」は、転覆した船に乗っていた妓女の鬼の起こす怪異の話である。

「唐邦」は冥官に連行された後に人違いと分かり解放される話で、「王矩」「王思規」は冥界の主簿に任命されて死期を迎える話である。

「劉遁」「張君林」は人の家に鬼が居着いてしまう型の説話である。

「劉遁」は野葛の毒を煮て飲ませて鬼を追い払うという点が「劉他」（卷三十九）と共通する。

「陳臯」「新蔡王昭平」は鬼に襲われる話。

「袁無忌」は、鬼がきちんと供養されることを求めて現れる型の話である。

本巻は家族や親しい知人の鬼が現れる話を多く収録している。

## 八 訴える鬼―巻三三三 鬼八―(宋)

### 卷第三三三 鬼八

張隆 食を求める鬼を張隆は殺そうとして失敗し、改心すると財宝を与えてくれた。

吉岩石 吉岩石は鬼を饗応し死を免れるが、泰山府君の主簿を命じられ覚悟して死んだ。

富陽人 王という人が、罨の中の蟹を木材に化けて奪った山神を焼き殺した。

給使 眠っている給仕の世話をする女は、病死した給仕の母であった。

甄法崇 江陵令甄法崇は鬼の訴えを書き留め、借り主に遺族に米を返させた。

謝晦 謝晦が赤鬼から受け取った血の満ちた銅盤は実は紙で、鬼も消えた。

謝靈運 謝晦が自らの首を手を持って現れる等の怪異があった後、謝靈運は誅殺された。

梁清 梁清が士を好むと聞いて家に居着いた鬼は、地方官任官の時期を予言した。

徐道饒 祖霊を称して徐道饒の家に居着いた鬼の正体は、猿のような姿の妖物であった。

東萊陳氏 家に住む百余名の人を殺しに来た鬼を、多数の凶器で威嚇し、他所に行かせた。

謝道欣 会稽郡の大鬼は郡内の禍福、特に謝氏の吉事凶事について予兆を示した。

沈寂之 沈寂之の家に鬼が居着いて、様々な悪戯を行った。

王胡 王胡は亡叔に導かれて群山で鬼と会い、罪福苦楽の報いを知り仏道に入った。

陶継之 陶継之の前に嘗て誤って殺してしまった樂人が現れ、まもなく陶継之は死んだ。

朱泰 病死した朱泰は、鬼となって母を慰め、自らの葬儀を節約して準備した。

戴承伯 戴承伯は寺を買った際に詐取した地に家を建て、鬼の警告を無視して殺された。

章授 章授が船に乗せてやった男は、病死の運命の人を病気にする鬼であった。

旋統門生 無鬼論者の学生が、自分を冥途に連行する鬼に頼んで似た人を身代わりにした。

張道虚 張道虚兄弟は購入した宅地の遺体を呉將軍の塚に改葬し、鬼に殺された。

「張隆」「梁清」「徐道饒」「沈寂之」は鬼が家に居着く話型の話。「梁清」は鬼が食客や幕僚のような立場で主人と接しているのが、他の同話型の説話と異なっている。「東萊陳氏」は鬼の集団が百余人の命を奪いに家に押し寄せるといふ、家を騒がす鬼の説話からスケールアップした話である。

「吉石」「旋統門生」は冥界に召喚される話型の話。「旋統門生」には、無鬼論者が鬼を論破するというモチーフも入っている。

「富陽人」の鬼は山神で、「章授」の鬼は人を病死させる鬼であり、ともに特殊な鬼に関する説話である。

「給使」は母、「王胡」は叔父、「朱泰」は息子の鬼が現れる話である。「王胡」は、「鬼が親族と語らい、冥界について問答をする」話型のバリエーションであり、問答ではなく、実際にあちこちに連れて行き、鬼の世界について知らせるというのが独特の趣向であるが、これもまた「冥界巡り」という、ポピュラーな話型となつてゆく。

「甄法崇」「陶繼之」「戴承伯」「張道虚」は鬼が人の不正を訴える説話である。「甄法崇」は鬼が現世の官に訴えて貸しを返済させ、「陶繼之」は天に訴え理を得て鬼が人に復讐をする。「戴承伯」「張道虚」は、土地を奪われた鬼が相手に直接訴えた後に、その相手を取り殺している。

「謝晦」「謝靈運」は著名人の逸話であり、鬼との遭遇は、それぞれの悲惨な末路の予兆であったと考えられる。「謝道欣」は、謝晦や謝靈運もその一族である名門謝家の氏神的存在である大鬼についての説話である。

本巻「陶繼之」に見られる、鬼が天に訴えて道理のあることを認めてもらった上で、生前の敵に復讐に来る、というのは鬼話に多く見られるプロットであり、本話はその早い例である。

## 九 凶宅―卷三二四 鬼九―(宋)

### 卷第三二三 鬼八

秦樹 秦樹が一夜の宿を借り、共に過ごした女は鬼であった。

竺惠熾

沙門竺惠熾の鬼が、食肉のため餓狗地獄に墜ちたことを応報の証として語った。

郭銓

郭銓の鬼が婿と娘に、罪を許されるように僧を集め追福をすることを頼んだ。

賀思令

賀思令は嵇康の鬼より琴の曲、広陵散を伝授された。

山都

山都は深山に住み、蟹を好む。変化能力がある。人との商いには姿を現さない。

区敬之

頓死した区敬之の遺体に鬼神が近づくと、遺体は皮肉が剥離し白骨と化した。

劉雋

劉雋の家の前で遊んでいた六、七才の子どもたちは鬼であった。

檀道濟

檀道濟の子が夜、鬼に縛られた。檀の家は元は步闡宅で、歩も檀も誅殺された。

石秀之

石秀之は造船技術により冥府に召されたが劉儒に及ばないと断り、劉が死んだ。

夏侯祖観

夏侯祖観の死後、後任の沈僧榮の琵琶妓を、祖観の寵妾の鬼が連れて行った。

張承吉

張承吉の家に住み着いた鬼が様々な悪戯をした。

梁清

梁清は家に住み着いた鬼を外国の道人の祈祷で追い払った。

崔茂伯

崔茂伯の亡女が会にきた許嫁の妻は、思いが募って病死し、亡女と合葬された。

巢氏

巢氏の婢の恋人となった鬼が家に居着いてしまい、巢氏は婢を家から出した。

胡庇之

胡庇之の家の鬼は仏弟子で、仏への帰依によってのみ抑えられるのであった。

索頤 索頤の父は妖を信じず凶宅を買い、多年安吉であったが突然一族を皆殺害した。

「秦樹」はオーソドックスな冥婚譚であり、「崔茂伯」は現実にも存在する死者同士の冥婚である。

「竺惠熾」「郭銓」は肉親や知人の鬼が訪れるパターンであり、「夏侯祖觀」はその派生型と考えられる。

「賀思令」は「嵇康」（卷三二七）の後日譚的な内容であり、広陵散は鬼から嵇康へ、鬼となった嵇康から賀思令へと伝承されたことになる。

「山都」「区敬之」において語られる鬼は、鬼よりもむしろ妖怪に近い存在であり、「山都」の鬼は山に棲む山精、「区敬之」の鬼は屍を喰う魍魎に似る。

「劉雋」は幼児の鬼の話。死者の持ち物が他人の手にあることから、鬼となっていたことが判明するのは、冥婚譚にもよく見られるプロットである。

「檀道濟」「張承吉」「梁清」「巢氏」「胡庇之」「索頤」は、鬼が居着いてしまった家に関する説話である。「胡庇之」は、人を悩ます鬼が仏弟子であるという、珍しい設定が見られる。

「石秀之」は冥官に任命される話型に属する。

本巻は鬼が居着いてしまった家すなわち凶宅に関する説話を多く含むことと、仏教的要素が頻出するようになったのが大きな特色である。

十 死をもたらず鬼―卷三三五 鬼十一（宋）

卷三三五 鬼十

王聘之 王聘之の妻の鬼が薄葬を怒り、祭りの机を空中から擲った。  
孟襄 孟襄の亡妻の鬼のふりをして豚や雄鳥の姿の鬼が家で暴れた。

司馬文宣 司馬文宣の家に、弟を装う鬼に続いて、僧と問答をする鬼が住み着いた。

虞德嚴猛 虞德は老女の招き寄せた虎と格闘した。嚴猛の亡妻は虎の手先となっていた。

郭慶之 郭慶之の家の婢と通じてしばしば訪れる黄父鬼は変幻自在の鬼であった。

薄紹之 薄紹之の家を騒がせた鬼は、大道神に懲らしめさせると脅すといなくなった。

索万興 闖入者が置いていった黒い物が床を這い回り、索万興は病気になる死んだ。

郭秀之 七十三才の郭秀之が病死するまで、五十三日間、迎えの鬼が毎日樹上にいた。

庾季隨 庾季隨は病床を騒がす鬼を追い寺に行き、鬼に生気を取られて数日後に死んだ。

申翼之 申翼之は盛道児の遺児を賄賂を取って寒門に嫁がせ、盛道児の鬼に叱責された。

王懷之 娘が急病を発し、王懷之の見た樹上の老婆の様になったが麝香を服して治った。

柳叔倫 柳叔倫が婢のそばで鬼を斬ると、婢が病死し、翌日には遺体が無くなっていった。

劉廓 死んだ囲碁仲間の朱道珍から来た手紙を読んだ劉廓は、病気になる死んだ。

王瑤 王瑤の死後、家を騒がす鬼が庾家に來、庾は錢が怖いといつて錢を投げさせた。

王文明 王文明の妻の鬼が、王が妊娠させた婢を打ち、その後、怪事があり文明と息子たちが死んだ。

夏侯文規 夏侯文規は死んで一年後に家に帰ったが、蒜を嫌った。

「王騁之」「申翼之」「王文明」「夏侯文規」は家族が鬼となつて帰ってくる話型である。

「孟襄」「司馬文宣」「郭慶之」「薄紹之」「王瑤」は家に居着く鬼が怪を為す話型の話。「司馬文宣」において鬼が「本来その家にいる筈の先亡の鬼はそれぞれ属する所があつて空座であつたので仮に身を寄せた<sup>(4)</sup>」と言っているのは、伝統的な死者は鬼になるという思想と、死者は冥府に行き転生するという仏教的な思想を折衷した考え方として興味深い。

「虞徳敵猛」は、虎に殺害された人間は虎に使役される「俚」という鬼になるといふ明代の『躡麈筆記』に見られる説の古い例として注目される。

「索万興」は鬼に取り殺される話。「王文明」も後半は一家の男が皆死に絶える話である。「庾季隨」も鬼に取り殺される話であるが、庾季隨はすでに病氣であり、死期が迫つていたとも考えられる。期日までに死者を冥府に連行しなければならぬ鬼が、「膂力絶人」で病氣に抵抗する体力を持つ庾季隨に対して、誘き出し運命の強制執行を行ったという解釈もできる。「王懷之」は娘が麝香によつて取り殺されるのを免れる話。「柳叔倫」は婢が取り憑いていた鬼に殺された話と考えられる。

「郭秀之」「劉廓」は死期が來たことが鬼によつて告げられる話。

本巻は、鬼に遭つたために、あるいは運命として人が死ぬことをテー

マとした話が多い。

## まとめ

今回分析した「卷三一六 鬼一」から「卷三二五 鬼十」の説話は時代としては春秋から南朝宋まで、鬼に関する説話の最初期のものである。その内容は、後の鬼話とは異なり未だ仏教の影響が希薄である。より原初的な靈魂観としての祖靈信仰や、社会制度としての家や婚姻・葬儀と関連する話が多い。

最後に、今回分析した諸々の鬼話において頻出した話型についてまとめておきたい。

**冥婚譚** 男が女の鬼と結婚するパターンが多く、女と男の鬼の例は少ない。跡継ぎの子を産む場合も有るが、夫婦は長く共に暮らすことはない。

**塚墓宿泊譚** 一夜の宿を借りた家が、翌日見ると墓であつたという話。冥婚譚にもよく見られる話型である。

**変鬼帰宅譚** 鬼となった家族や知人が帰ってくる話。死後の自分の身分・境遇、鬼ゆえに知り得る家族の運命、冥界の秘密などを鬼が語る。仏教の影響が強まるにつれて追福を求めるパターンも増えてくる。再婚した配偶者への憎悪から現れ、危害を加える例も多い。

**冥界召喚譚** 冥界の吏である鬼が人を冥途に召喚する。召喚された人が命令に従い冥途に赴く話もあるが、賄賂や身代わりなどの手段で死を免れようとする話が多い。後には、冥途に行き、その際の見聞を蘇生後に語る「冥界訪問譚」の話型が増えることになるが、今回扱った説話には

まだ見られない。

**鬼神遭遇譚** 外や自宅（厠の例も多い）などで鬼に遭遇するという話型。逃げたり争ったりする展開の場合は、その場で取り殺されなくても、間もなく絶命する話が多い。鬼神に改葬や廟の修復を依頼されるというパターンも少なくない。

**凶宅鬧鬼譚** 「鬧鬼<sup>どろき</sup>」とは、鬼が騒ぐことである。家に鬼が居着いて、家人を悩ませるといふ話型であり、初期の鬼話にも多くのバリエーションが見られる。その家の元の持ち主であったり、外から来たり鬼の出自も様々であるが、振る舞いも騒霊現象程度から家人の命を奪う話まで多岐にわたる。食を盗む、食を求めるといふ要素が多くに見られる。例は多くないが、家の人を助ける鬼の話もある。

※本稿は科学研究費基盤研究（C）研究課題「鬼文化・冥界表象からの日中比較説話文学史の構築」【研究課題番号：26370432】の研究成果の一部です。

- 
- (1) (一) 内の時代表記は、その巻に収録されている説話の背景となっている時代を示したものである。
  - (2) 本稿では『太平広記』本文のテキストとしては中華書局刊校訂本を使用し、各巻の説話排列・タイトルもこれに拠る。
  - (3) 本稿における各説話の内容の解釈においては、木村秀海監修・堤保仁編『訳注太平広記 鬼部二』（やまと昆崙企画 一九九八）を参考とした。
  - (4) 「汝家亡者各有所属。此座空設、故権寄耳。」